

宇宙生命哲学

ことはじめ

76

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

ビル・ゲイツ氏 全財産の99%（約27兆円）
を世界保健に寄付

米国・マイクロソフト社の創業者・ビル・ゲイツ氏は、今後20年で、全財産の99%、2000億ドル（約27兆円）をグローバル・ヘルス（世界保健）のために寄付すると表明した。ゲイツ氏は、母子の予防可能な原因による死亡の防止、マラリアやポリオなどの疾病の撲滅、数億人規模の貧困からの脱却の3つの目標を挙げている。ゲイツ氏の行動を、「宇宙生命哲学」的に読み解いてみよう。

100年前に登場した量子力学は、それまでの科学では手の届かなかった領域に技術の進展を促し、生命現象の本質に迫る遺伝子操作技術やコンピュータなどの情報処理技術が、誰にでも身近な存在になる時代を実現した。これらの技術をいち早く企業

化したグループは、従来の社会では考えられないスピードで世界の富を手に入れた。GAF Aをはじめとする富裕企業が世界の富の大半を手中に収めている。しかし、これらの富は人類が営々として築き上げてきた直近の科学の力を借りて手に入れたものであり、その成果は、特定の個人・団体・国家に帰属するのではなく、広く人類共通の財産として扱うべきである、というのが「宇宙生命哲学」の考え方である。

ゲイツ氏は、1975年にポール・アレン氏とマイクロソフト社を起業し、大成功を収め、2014年には会長職を退任し徐々に経営の第一線から退いている。2000年に設立されたビル&メリンダ・ゲイツ財団は、世界における病気と貧困への挑戦を目的とし、彼らの死後も数十年は継続して活動を続けるとしていたが、トランプ政権の開発途上国への援助の切り捨てなどを受けて、緊急性を重視し、2045年までにその全財産を寄付して活動を終了することにしたという。財団が慈善団体としての立場を利用して税負担を軽減しているとか、世界の保健医療制度に対する影響力が大きすぎるといった批判もあるが、富裕層は得た富を社会に還元する

べきだとする彼の考えと行動は、富裕者、貧困者の別なく、地球上の全ての人類に共有されるべきものであると思う。富裕者が奢ることなく、貧困者が卑下することなく、全人類が明るく、幸せに、素敵な



地球人を目指す社会になって欲しいと、ゲイツ氏は懸命に旗を振っているように思える。現在の激しい技術革新の世界では、一瞬にして富裕層が貧困層に、貧困層が富裕層に入れかわる可能性が、常に存在するということでもある。